

修験しゆ の世界げん

— 笹井觀音堂とその配下 —

三月十六日(土)～六月十六日(日)
平成十四年



狭山市立博物館

〒350-1324 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1 稲荷山公園(ハイドパーク)内
TEL. 042-955-3804 FAX. 042-955-3811

R100
吉野配合率100%再生紙を使用しています。

開催にあたって

日本が世界に誇れるものの中に、春夏秋冬という季節感があります。これは、自然や景観だけで生み出されるものではなく、ひとびとの生活の中からも見いだすことができるものです。年とりの節分、梅雨明けの夏祭り、十五夜の月を待ち、来たる年の祝いに備える。これらの年中行事や通過儀礼は、私たち毎日の生活、あるいは一生の生活にかかすことのできないものです。しかし元来、これらの行事の多くは、実は修験のひとびとを介して行われていたものであったと考えられています。

今回の企画展では、現在ではとらえられにくい修験の世界を紹介し、その時代における社会的役割を理解していただくとともに、中世近世をとおしてこの地域で活動していた修験寺院で、本山派聖護院末諸国二十七先達のひとつである笛井觀音堂とその配下を中心に、狭山の修験の実像について論及します。

修験の存在は、現在では山奥にある寺院、山伏姿、火渡りの行などといった断片的なものでしか知ることができません。しかしひとびとの生活に密着していた存在として、遠く忘れられていた修験の世界をかいまみることにより、狭山の原風景のひとつを知る機会となれば幸いです。

最後に、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成14年3月 狹山市立博物館

- ◆開館時間 午前9時～午後5時
- ◆休館日 3/18・22・25、4/15・22・26・30、
5/7・13・20・24・27、6/3・10
- ◆入館料 一般/150円(100円)
高校生・大学生/100円(60円)
小学生・中学生/50円(30円)
※()内は20名以上の団体
- ◆交通 ●西武池袋線「稻荷山公園駅」から徒歩3分
●西武新宿線「狭山市駅」西口からバス
(稻荷山公園駅行)終点徒歩3分
●圏央道狭山日高インターチェンジより15分(5km)



銅造十一面觀世音菩薩立像(觀音堂)

講演会

演題 『修験道と狭山』

日時 平成14年4月21日(日)

午後1時30分から

場所 狹山市立博物館 研修・講義室

講師 真言宗智山派小僧都・最上山三光院葉王寺
滝谷 義学氏

●受講希望の方は、3月19日(火)午前9時から狭山市立博物館へ電話でお申し込み下さい。(定員50名)

展示解説

日時 平成14年3月30日(土)、4月27日(土)
5月25日(土)

各日とも午前10時から

(事前申し込みは不要です。)

解説 当館学芸員



〒350-1324 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1
稻荷山公園(ハイドパーク)内
TEL.042-955-3804 FAX.042-955-3811

狹山市立博物館

修験の世界

しゆ

げん

— 笹井觀音堂とその配下 —

三月十六日(土)～六月十六日(日)

平成十四年



挾山市立博物館

100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。

開催にあたって

日本が世界に誇れるものの中に、春夏秋冬という季節があります。これは、自然や景観だけで生み出されるものではなく、ひとびとの生活の中からも見いだすことができるものです。年とりの節分、梅雨明けの夏祭り、十五夜の月を待ち、来たる年の祝いに備える。これらの年中行事や通過儀礼は、私たち毎日の生活、あるいは一生の生活にかかすことのできないものです。しかし元来、これらの行事の多くは、実は修験のひとびとを介して行われていたものであったと考えられています。

今回の企画展では、現在ではとらえられにくい修験の世界を紹介し、その時代における社会的役割を理解していただくとともに、中世近世をとおしてこの地域で活動していた修験寺院で、本山派聖護院末諸国二十七先達のひとつである笹井觀音堂とその配下を中心に、狭山の修験の実像について論及します。

修験の存在は、現在では山奥にある寺院、山伏姿、火渡りの行などといった断片的なものでしか知ることができません。しかしひとびとの生活に密着していた存在として、遠く忘れられていた修験の世界をかいみることにより、狭山の原風景のひとつを知る機会となれば幸いです。

最後に、本展開催あたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

狭山市立博物館

【凡例】

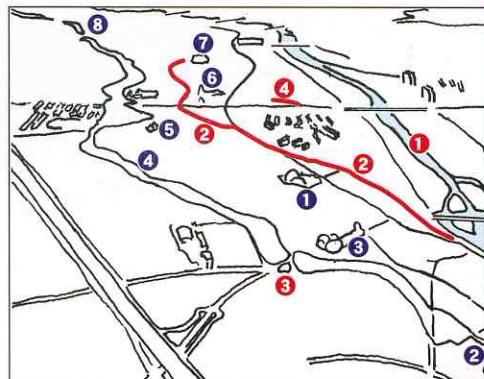
- このパンフレットは、平成14年3月16日から6月16日まで開催する平成13年度春期企画展「狭山の修験—笹井觀音堂とその配下—」のパンフレットである。
- 字体については、便宜的に訂正を加えたところもある。
- 掲載資料写真については、原則として由来する修験寺院を表示した。
- 会期中の展示替え等により、パンフレット掲載資料でも展示していない場合がある。
- この企画展は、吉田弘・大谷武志・吉里真奈美が担当した。

協力者

- 笹井觀音堂
薬王寺
柏原白鬚神社
小山坊
諸井マス子
立川明(奥富神社)



笹井地区航空写真(平成6年)

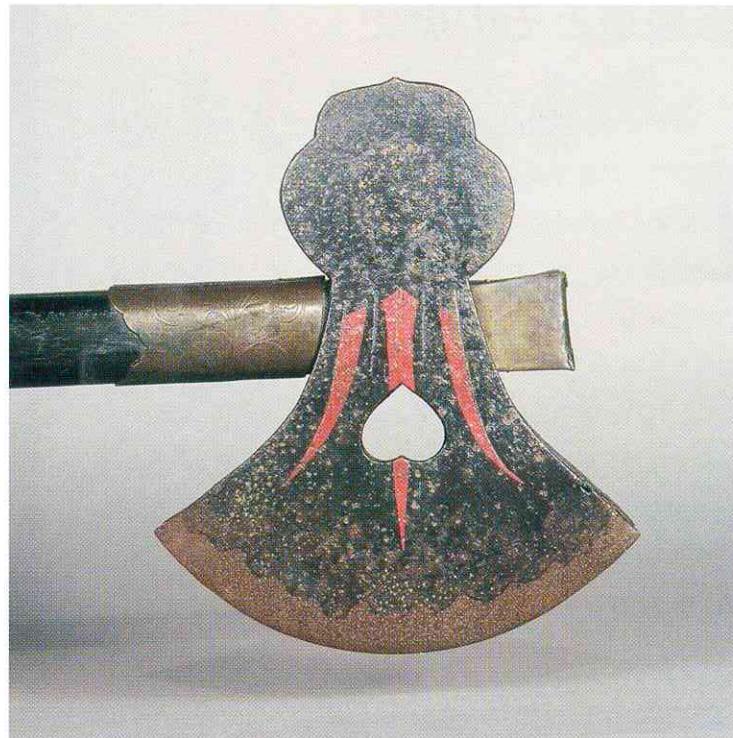


- ① 觀音堂
② 薬王寺薬師堂跡
③ 笹井白鬚神社
④ 瀧不動
⑤ 宗源寺
⑥ 明光寺
⑦ 広瀬神社
⑧ 影隠地蔵 (旧正覚院持仏)
- ① 入間川
② (広瀬飯能道)
③ 烏坂
④ 日光脇往還

修験とは

修験とは、「しゅげん 験げんをおさめる」ことを目的としたものです。「験」とは、自分が修行をした結果として身につくもので、これを「修める」ことにより、自分のみならず他人にも書きめや効果を与えることができるようになるということが、修験の本質であるといえます。こうしてみずからを鍛えたひとびとを修験者といいます。

修験は、神道、仏教、道教などの教理を究め、難行苦行によって身体能力を高め、「験を修める」ことにより、超自然的な力を身につけ、修験道という実践的で独自な宗教観を生み出しました。修験道の教義は、このような他宗教他宗派の教理が規範となっていますが、特に「験を修める」ための修行の方法や作法



法具 斧 観音堂



板笈 観音堂

が中心になっています。これによって身につけた超人的ともいべき力により、修験者は、その時代のひとびとの生活を助け、その各時代で習得できた広範な知識と教養に基づき、多才な芸能を身につけ、地域の文化性を高めていきました。中世の代表的な芸能である「能」や「狂言」においても、その時代の一職業人として修験者(山伏やまぶし)が作品あるいは登場人物に多く見ることができます。このように修験は、その時代に生きたひとたちの生活に溶け込んだものでした。

梵字の意味は?

修験道とその歴史

一般的に修験道は山岳信仰と密教が結びついた神仏混合の宗教で、修験者はみずからを神仏の道にいたらしめるため、けわしい山をめぐり歩くなどして修行を積み、護摩を^{ごま}たき祈禱を行いました。このため、その信仰には「山の神」の存在があり、ここから発展して、自然崇拜や民間信仰が対象となっていました。修験道が係わった信仰としては、日待、月待、庚申、地祭、星祭、三宝荒神、鬼門、大黒天、妙見、金神、疱瘡、蘇民将来などがあります。また教義は名も知られていない多くの修行者によって確立されていった作法や技術の体得を中心としたもので、灌頂、護摩、祈禱、引導、勤行次第、印信などがあります。これらの他に、「山の神」という個別の靈魂崇拜とともに巫術(のりわら)、呪術(雨乞い、治病、豊作など)、占術などを身につけました。減罪(言霊抜、潔斎など)、再生、禁忌などにも係わりました。

修験道の開祖は大和国葛城山の役小角といわれ、奈良時代中期に活躍しましたが、呪術的な仏教教理と陰陽道を駆使し、「妖言、衆を惑わす」といわれ、朝廷から伊豆国に流されたりしました。しかし、山岳信仰に基づく修行はその重要性が叫ばれ、役小角を排斥した南都仏教においても盛



木造役行者半跏像　観音堂

んに行われました。東大寺開山に寄与した良弁も相模國大山寺を開山したという伝承があり、山岳信仰を重視していましたことがわかります。

平安時代では、天台宗の最澄と真言宗の空海により山岳仏教と密教が指導され、その普及により山岳信仰が盛になりました。地方においても、日光、白山、立山、伯耆大山、羽黒山、彦山などにも修験者が客僧として入り活動をはじめました。1090(寛治4)年白河上皇の熊野御幸に際し、園城寺の増誉が先達として熊野三山検校職に補任されたことにより、この検校職が代々園城寺の長吏に受け継がれ、熊野三山を統括し、後には修験者全体を治めるようになりました。

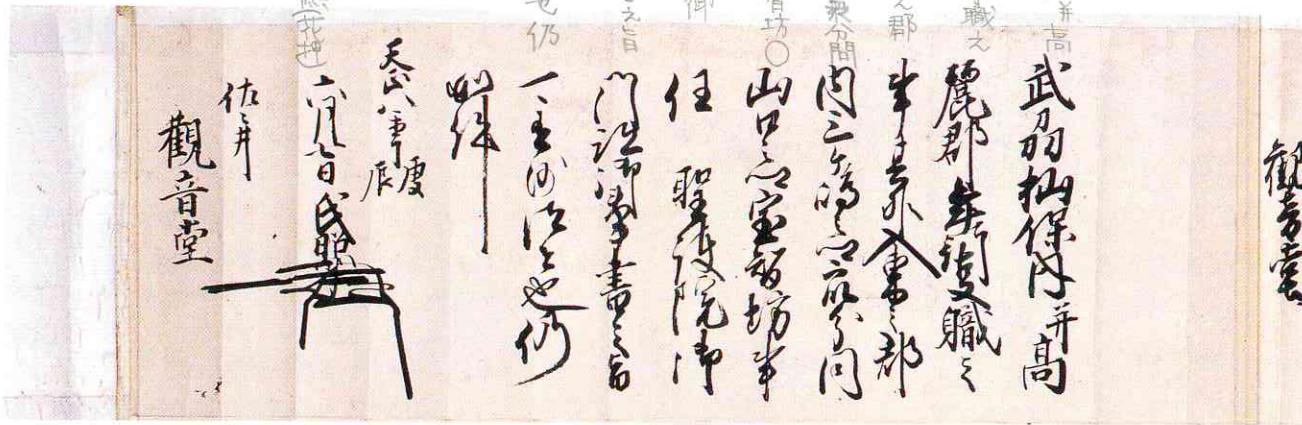
鎌倉時代では、源平の争乱により衰退していた南都北嶺の大寺院が復興し、一方で淨土教や禪宗による鎌倉新仏教が栄えましたが、熊野の靈験により時宗を興した一遍、白山信仰に道場を求めた道元、七面山を行場にした日蓮など山岳修行を課した宗派はさらに増えていました。これらの新仏教は、教えのむずかしい既存仏教に代わって武士や一般民衆の間にとけこんでいましたが、これには修験を身につけた遊行の聖が徐々に新仏教に取り込まれたことにより、普及していました。この勢いにより、修験道は一時衰退しますが、醍醐寺(京都)を開いた聖寶が修験道を理論化したことにより、ふたたび盛んになりました。その後、修験道は天台宗系と真言宗系に分かれ、前者は園城寺の末で増誉が開いた聖護院を本山に本山派と称し、後者は聖寶が開いた醍醐寺三宝院を本山に当山派と称しました。



銅像十一面觀世音菩薩立像・同背面

延文三(1358)年　観音堂

※P.8 木造十一面觀世音菩薩坐像の中に入っています。



埼玉県指定文化財 篠井家文書 北条氏照判物 観音堂

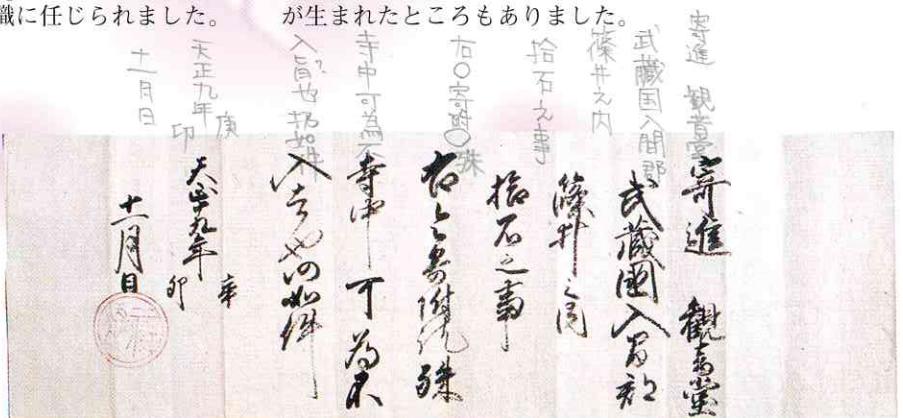
室町時代になると、本山派、当山派とともに、地方修験を本山に組織化するようになり、その一方で地方修験では、信仰の由来や靈験を表す縁起がまとめられ、それぞれ諸山の体制が確立していきました。1486（文明8）年、聖護院門跡の道興准后が笛井觀音堂を訪れ滞在してから以後、聖護院との結びつきはいっそう強くなりました。このことにより、笛井觀音堂は周辺地域の修験寺院を統括して勢力を伸ばし、1552（天文21）年、聖護院門跡から武州柳保（東京都青梅市付近）と高麗郡の年行事職に任じられました。

この間修験道の教義は徐々に固められ、修行者は山伏の12道具を身につけ、峯入修行をし、最後に認められて、正灌頂を受け即身成仏するという修行を経て、一宗一派にかたよらない修験者としての活動をはじめました。十六世紀中ごろから、狭山周辺は戦国大名の北条氏の勢力下になりますが、北条氏は笛井觀音堂

配下の修験者が軍役につくことを条件に、既存権利と領地を安堵しようとしたしました。これは、諸国をめぐる修験者の情報ネットワークと、山野を歩きまわることできたえた能力を有効に利用するためであったと考えられます。

江戸時代になると、1613（慶長18）年「修験道法度」により、全国各地を遊行していた修験は本山派当山派のどちらかに属するようになりました。これにより本山派の山伏は当山派の山伏より役儀料を取れないようになりました。この時羽黒派は日光輪王寺宮に属し、本山派当山派羽

黒派の修験三派となりましたが、このことは、本山派は天台宗寺門派、当山派は真言宗、羽黒派は主に天台宗山門派の流れに属することとなり、これら修験宗派がこれら仏教宗派の影響を受けるようになりました。その後修験三派では中世以来の組織から末派修験の掌握を強化するあまり、修験三派が競合して争いが増え、各派が「正統邪教」を旨とした宗論を応戦しました。さらに修験は個人的な宗教活動を中心であったことから、檀家をもつ宗派寺院との隔絶が生まれたところもありました。



徳川家康寺領寄進状 観音堂

明治時代には、天皇を中心とした近代国家を目指していましたが、その影響は宗教の世界にも及び、神仏分離令が発効されていく中で、廢仏毀釈という社会運動にまで発展しました。これにより修験道も1872（明治5）年の太政官布告により廃止となり、狭山の修験寺院も廃寺となったり神職へ転じたりしました。しかし、明治時代末には修験道の覚醒運動が始まり、第二次世界大戦後には修験教団が独立し、天台宗系が5流派に分かれ、旧当山派は真言宗醍醐派として活動し、現在にいたっています。

山修験・里修験

修験道の歴史では、本山派・当山派・羽黒派などといった宗教組織による分類がされますが、ひとびとの生活の中から見ると、やましゅげん 山修験・さとしゅげん 里修験といった分類を知ることができます。山修験とは、文字どおり修験の信仰の対象となる「山」に係わる修験で、地方修験で全国でも有数の高山を信仰の対象にしたものが本山修験と呼ばれ、ちなみに大峯山（熊野、吉野）、出羽三山、彦山、石鎚山、白山、立山、富士、日光、伯耆大山を、特に日本九峯といいます。一方この日本九峯以外でも修験の山として信仰を集めているものを地方修験と呼んでいます。代表的なものでは、木曾御嶽、戸隠、妙高、伊吹、武藏三峯、越後米山などがあり、いくつかの連続する峰々や峡谷をもつ山々が修験の道場となっていました。埼玉県内の地方修験では、慈光寺、岩殿山、両神山、武甲山などがあります。これらの修験は、山への信仰、寺院への信仰が多くのひとびとの心と生活のよりどころとなっていました。たとえば、海で生活するひとびとにとて、これら信仰の山は、「山当ての山」と呼んで、目印のない海の上で方角を知る目標物として重要な役割を持っていました。そしてこのことは、航海の安全や大漁祈願といったかたちで、こういったひとびとに信仰の輪を広げていきました。



護摩札　観音堂

ひとびとの心のよりどころであった「山」には、頂、峰、崖、洞、谷、川、などさまざまな自然環境があり、それらがすべて修行の場となりました。そして目標の達成には、性差や聖俗といった社会的な差異などを、卓越しなければならない段階と考え、孤独できびしい修行の世界へ入っていきます。修行には、みずだち 水断、ごくだち 穀断、滝行、覗き、奥駆け、火渡り、駿競べなど、単純な行為でありながら、深遠な精神世界をまのあたりにするような行が実践されます。このようなきびしい世界の一方で、寺社めぐりと呼ばれる観光性の高いものまで、ひとびとにはさまざまな信仰のかたちがありましたが、そのような登拝の先達や山麓での宿泊などをさえたのが、山修験に係わるひとびとでありました。

その一方で信仰だけではない生活をさえたものに、里修験があります。里修験とは、里村に定住してひどひとの生活に係わる修験で、今回紹介する修験の世界の中心となるものです。特に里修験の役割としては、氏神の別当、日待などの祭祀行事の執行、雨乞いや除災のための加持祈禱などがあり、ときには、現在でいうところの神主、僧侶はもちろん医者、薬剤師、教師などさまざまな役割をもった存在がありました。



版木　東林寺

狭山とその周辺における修験

中世では、熊野三山先達の活躍により、源平の争乱以来のおもだった関東の武士たちが熊野に参詣していたのが記録に残っています。また十四世紀に書かれた『太平記』には、「入間川の在家三百余宇、堂社仏閣數十箇所、一時に灰燼と成りにけり」とあり、当時の入間川周辺には多数の寺社があったことが推測されます。これらの中には、教義の関連性から天台宗・真言宗の宗派寺院あるいは神社の別当などで、修験道といろいろな係わりを持っていたものがあったと考えられます。

狭山における修験の存在では、室町時代中ごろから 笹井観音堂を筆頭にした本山派と、加佐志羽黒神社の存在から羽黒派が定着していました。羽黒派は、出羽三山を拠点に活動していた本山修験のひとつで、平安時代より盛んになったものです。加佐志羽黒神社は、十五世紀ごろ奥州から加佐志に遷座され、別当であった峯林寺は羽黒山恵日院といい、新義真言宗の寺院であったと伝えられています。

一方本山派では、文明年間（1469～1487）に聖護院門跡道興が、北陸、関東、東北などを巡歴し、観音堂、十玉坊、最勝院（川越市上寺山）、福泉坊（所沢市久米）などに立ち寄り、これによりこの地方において本山派の教団の組織化が進みました。このうち北条氏が関東を支配するようになると、地域的な影響力を持っていた修験寺院への干渉が増えてきました。修験寺院は、血縁的、地縁的、主従的な結びつきが強く、地方武士団との関わりが深かったことから、それまでも戦乱にかりだされることがしばしばありました。観音堂の古文書にも、配下の山伏を北条氏の軍役に参集させる旨の文書が伝わっています。また十玉坊は、たびたび寺院の位置を変え、最後には富士見市下南畑にある難波田館跡へと移転しました。このことは、おそらく武藏野の縁辺部での開発と、河越夜戦を含めた北条氏の争乱との係わりを考えることができます。

同様にこの時代の産業についても、修験との多くの係わりを



神鏡 薬王寺

知ることができます。室町時代から江戸時代にかけて、笹井から柏原にかけて、槍をはじめとした鍛冶師や仏像、懸仏などをつくる鑄物師といった冶金を職業にしたひとびとがいました。これらのひとびとは、制作に係わる技術や、材料をさがす独自の方法にいろいろな研究や工夫を重ねていきました。観音堂の周辺にも、鍛冶に係わる遺跡や伝承があること、同様に柏原の鍛冶師、鑄物師の分布を考えあわせると修験との係わりを見逃すことはできません。

江戸時代になると、幕府の宗教政策によって、本山派当山派羽黒派の修験三派は、本山派が天台宗寺門派、当山派が真言宗、羽黒派が主に天台宗山門派の流れに属することとなり、これら修験宗派は寺社奉行による支配によって仏教宗派の影響を受けるようになりました。その後修験三派では中世以来の組織から末派修験の掌握を強化するあまり、修験三派が競合して争いが増え、各派が「正統邪教」を旨とした宗論を応戦しました。その一方で各派組織の末端では、修験の地位と村落内での地縁的なつながりから、観音堂が指導的立場から配下として各派の修験寺院を吸収していました。このため、修験の修行の流れが本山派と当山派が混在する状況が生まれていました。

江戸時代の後半になると、修験寺院は祭祀など個人的な宗教活動が中心であったことから、檀家をもつ宗派寺院との隔絶が生まれました。このことにより、観音堂も一時勢力を落とした時期があったようですが、縁起や法脈を整備しなおすことで、組織の維持につとめました。この間狭山周辺では、文政年間（1818～1830）ごろ柏原に妙法山常楽寺という天台宗羽黒行人派の寺院が建立されました。この寺は、柏原村の名主を勤めたことがある増田家累代の供養のため建立されたのですが、羽黒派では、羽黒山が天台宗に、湯殿山四カ寺（別当大日坊、注蓮寺、本道寺、大日寺）が真言宗に属していたことから、おそらく観音堂では、修験三派の競合関係から一線を画していたと考えられます。柏原村と上広瀬村の境界あたりに、霞が関という地名が残っていますが、この地名も本山派である観音堂の「霞」と、羽黒行人派の「壇那場」という支配領域の境界を示しているのかもしれません。

笹井觀音堂

笹井觀音堂は、滝音山泊山寺（白山寺）と呼ばれ、役小角が開いたと伝えられる28坊のひとつ、また本山派聖護院末諸国二十七先達のひとつとして、室町時代から江戸時代にかけては、高麗郡、多摩郡、入間郡内の54か寺を配下に従える大寺でした。役小角は、702（大宝二）年に笹井を訪れ、滝の下で不動明王が現れるのをみて堂を建て、滝音山と名づけたと伝えられています。その後、衰退していた滝音山を再興したのは圓城寺の行尊で、平安時代後期の永久年間（1113～1118）に滝音山を訪れて堂を建て、みずから背負ってきた十一面觀音像を安置しました。寺名が觀音堂となったのは、このときからです。1486（文明八）年聖護院門跡の道興准后が觀音堂を訪れ滞在してから以後、聖護院との結びつきはいっそう強くなりました。そして、1552（天文二一）年觀音堂は聖護院支配の寺院を取りまとめる役として、聖護院門跡から武州袖保（東京都青梅市付近）と高麗郡の年行事職に任じられました。

十六世紀中ごろから、狭山周辺は戦国大名の北条氏の勢力下となります。北条氏は觀音堂配下の修験者が軍役につくことを条件に、既存権利と領地を安堵しました。その一方で觀音堂は年行事職の補任に伴い、十玉坊との対立が生まれました。十玉坊は、入東郡（およそ入間郡東部）と多摩郡清戸（東京都清瀬市）の年行事職に任じられていたことから、配下として掌握していた霞に係わる対立があったとも考えられます。この北条氏や十玉坊の関係を記した



木造十一面觀音菩薩坐像（かわ）
文政五（1822）年 観音堂



木造不動明王二童子像 観音堂

篠井家文書は、当時を知る重要な資料として埼玉県指定文化財となっています。

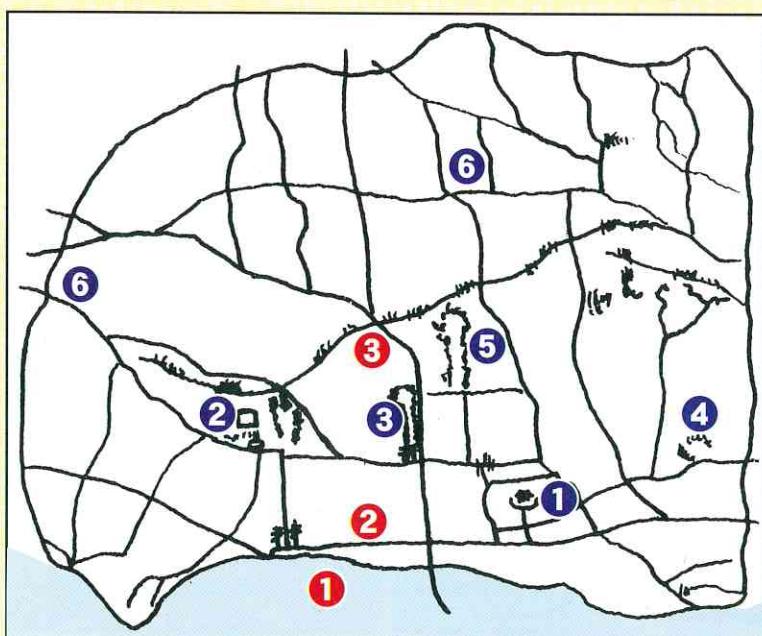
江戸時代になると、笹井觀音堂は修験各派の争いと徳川氏の宗教政策により寺領をわずか10石に減らされ、現在の土地に移転させられてしまいました。こうして觀音堂は一時衰退しましたが、江戸時代の中ごろになると、觀音堂の配下の中でも重要な地位にあったと考えられる福泉寺（青梅市上成木）や東林寺（狭山市下奥富）が助力して觀音堂の復興に尽力しました。

明治時代になって、圓城寺の末となりましたが、1872（明治五）年の修験禁止令により、廃絶されました。堂宇は、根本山薬師堂（入間市黒須）に寄進されましたが、この堂も廃絶されたため、臨濟宗壽昌寺（入間市二本木）に移され、現在にいたっています。現在の觀音堂は、廃寺跡に建てられたものです。

さて、觀音堂は、本山派諸国二十七先達のひとつとして、江戸中期で54か寺、明治初年には68か寺を配下に従えていました。江戸時代では、修験三派が各派との争いと徳川氏の宗教政策により、組織を維持することに苦心していましたが、組織の基盤であった里修験の世界では、地縁的な結びつきが強いことから、觀音堂の配下にも当山派寺院が



観音堂所領絵図 薬王寺



- ① 觀音堂
- ② 薬王寺
- ③ 笹井白鬚神社
- ④ 宗源寺
- ⑤ 土屋稻荷神社
- ⑥ 觀音堂御朱印地

- ① 入間川
- ② (広瀬飯能道)
- ③ 烏坂



聖護院御用札　観音堂



印「觀音堂」　観音堂



衣装　観音堂

柿染めらしい

名を連ね、共同社会である村落の中で共存していました。こうした配下寺院の管理を見ると、観音堂の下に、その寺務を司る役僧として薬王寺が執務をしていました。この他に、明治初年の資料によると、役僧を補佐する手廻り（手伝い）役僧として長寿院があり、さらに役僧を助力する手廻り（手伝い）同行として、明光院、みょうこういん 大膳院、大行院の3院があり、観音堂の執務に従事していました。また、配下の寺院で住職がいなくなつた場合には、その寺院は無住となり、観音堂が直接出張して寺院の役割を果たしました。

観音堂には、当時の繁栄を語り継ぐさまざまないつたえが残っています。観音堂は聖護院門跡の配下であったため、天皇家の菊花紋を預かっていた上、江戸時代になると、徳川家の祖先回向のため、徳川家の永代位牌を供養していました。このため、現在の飯能市に先祖伝來の所領があった中山のお殿さまが観音堂の前の街道を通過する時には、恐縮して観音堂の裏手の脇道を通っていましたことから、この道を「殿さま街道」と呼ぶようになったと伝えられています。江戸時代中ごろの童唄には、「観音堂に火がもゆる。おらも行ってあたんべえ。」という唄が伝わっています。このことから観音堂が地域のひとびとに広く親しまれていたということがわかります。

また、笹井には滝不動という小祠があります。この脇を流れる滝の音を聞いて役小角が観音堂を開いたと伝えられ、修験者は、この滝にうたれて修行したといわれています。このように観音堂周辺には、修験に関連した地名がたくさん見受けられます。このことを見ても笹井における観音堂の存在の大きさを知ることができます。

観音堂周辺の地名	地　名	備　考
寺社に係わる地名	べとう（別当）、大門、宮地、神明	施設・役職など
塚に係わる地名	神おりりつか（神送り塚）、念仏塚、やえんつか（野猿塚）、供養塚	祭祀場など
地形に係わる地名	渕上、滝ばけ（滝はけ）、滝ノ上、桜株、竹の鼻、町谷滝、滝谷戸	修行場・集落など
そ　の　他	矢ヶ町、しば（芝、柴）、さいかち	※古文書・絵図面等による

笛井観音堂の

配下寺院所在分布図



観音堂の配下寺院

所 在	寺 院 名	寺 持	備 考	所 在	寺 院 名	寺 持	備 考
群名・村名(現在の所在)	1772(明治九)	1868(慶応四)	寺 格	群名・村名(現在の所在)	1772(明治九)	1868(慶応四)	寺 格
高麗郡芦刈場村(飯能市芦刈場)	彌勒山長徳寺	同左	正年行事	高麗郡中藤村(飯能市中藤)	内出山三重院	—	
高麗郡笠幡村(川越市笠幡)	玉野山大泉院	同左	正年行事	高麗郡中藤村(飯能市中藤)	神宮山寶藏院二代左中	同左	無住
高麗郡芦刈場村(飯能市芦刈場)	赤城山福泉寺	同左	無住	高麗郡柏原村(狭山市柏原)	薬王山広永寺光学院	小山寺 (小山坊)	諸同行
高麗郡宿谷村(毛呂山市宿谷)	漱峯山金剛寺明覺院	妙覺院	別當	高麗郡下奥富村(狭山市下奥富)	愛宕山正學院(正覚院)	正覺院	諸同行
入間郡下奥富村(狭山市下奥富)	金峯山東林寺教王院	同左	別當	高麗郡柏原村(狭山市柏原)	鎮護山本明院多門	宮本院	別當
高麗郡赤工村(飯能市赤工)	福永山大正寺正蔵院	同左	諸同行	高麗郡上直竹村(飯能市上直竹)	寛有山大仙寺(正覚院)	同左	諸同行
多摩郡澤井村(青梅市澤井)	清流山仁仲寺	同左	諸同行	高麗郡上直竹村(飯能市上直竹)	富士山南仙寺	同左	別當
多摩郡烟中村(青梅市烟中)	箱根山大宮寺	同左	諸同行	入間郡大曾根村(入間市宮寺)	聖德山金藏寺	同左	諸同行
高麗郡下加治村(飯能市下加治)	加治山仙乗寺瀧泉院	同左	無住	入間郡高倉村(入間市高倉)	高峯山法行寺	行實寺	太子堂
入間郡矢寺村(入間市宮寺)	圓龜山金剛寺圓光院	同左	無住	高麗郡野田村(入間市野田)	花林山大照寺	同左	別當
高麗郡脚折村(鶴ヶ島市脚折)	八幡山正福院	同左	別當	高麗郡矢張村(飯能市矢張)	松尾山福正寺	—	
多摩郡御嶽村(青梅市御岳)	庭龍山大行寺	同左	諸同行	高麗郡野田村(入間市野田)	薬王山大行坊弟子	—	
多摩郡青梅村(青梅市青梅)	住吉山行法院	吉祥院	別當	高麗郡木村(日高市木村)	高林山本藏寺	同左	別當
高麗郡木村(日高市木村)	高根山玉泉寺	同左	別當	多摩郡飯能村(飯能市飯能)	大慈山成就院	—	
多摩郡白丸村(奥多摩町白丸)	正法院前往教学院	正源院	諸同行	高麗郡下見村(飯能市下見)	梅林山大光院	同左	諸同行
多摩郡上木村(青梅市木成)	不動山高成院	同左	諸同行	高麗郡日影村(飯能市赤沢)	日影山妙見寺	同左	別當
入間郡三ヶ島村(所沢市三ヶ島)	福荷山慈法院	同左	諸同行	高麗郡能村(飯能市能)	松林山善鴻寺	同左	別當
高麗郡赤工村(飯能市赤工)	福永山正蔵院	同左	諸同行	多摩郡羽村(羽村市羽)	還源山海本院二代主水	—	
高麗郡高萩村(日高市高萩)	金松山白嶺寺	—		多摩郡青梅村(青梅市青梅)	天瀬山玉蔵坊弟子左門	玉蔵院	諸同行
高麗郡高萩村(日高市高萩)	(萩之坊・高萩院)	吟松白鈴寺		多摩郡岩倉村(青梅市小曾木)	金峯山藏王院	同左	別當
高麗郡新堀村(日高市新堀)	高麗山大宮寺(清乘院)	同左	別當	多摩郡岩倉村(青梅市小曾木)	乗法院(明永山)	同左	諸同行
多摩郡北曾木村(青梅市木成)	平岩山常光院(住河院)	—		入間郡三ヶ島村(所沢市三ヶ島)	愛宕山玉蔵坊	—	別當
高麗郡平澤村(日高市北平沢)	漱峯山大泉寺藏寶院	同左	諸同行	入間郡北曾村(狭山市北曾)	天徳山宝泉寺	—	別當
(灌法山灌法院)				高麗郡井井村(狭山市井井)	最上山薦王寺三光院	役僧	
多摩郡上木村(青梅市木成)	八幡山福泉寺	同左	無住	高麗郡野田村(入間市野田)	吉祥院	諸同行	
多摩郡今井村(青梅市今井)	梅松山泉重院(千寿院)	泉寿院	別當	高麗郡久下分村(飯能市飯能)	本明院(大悲山)	諸同行	
				高麗郡清流村(日高市清流)	福蔵院	諸同行	
入間郡小谷田村(入間市小谷田)	威德山明王寺	同左	別當	多摩郡羽村(羽村市羽)	薬王院	諸同行	
秩父郡我野南村(飯能市南)	南峯山明王寺	同左	別當	多摩郡河内村(奥多摩町河内)	妙勝院	諸同行	
高麗郡我野町分(飯能市坂石町分)	平和山光明寺	同左	別當	高麗郡矢張村(飯能市矢張)	東泉院	無住	
高麗郡矢張村(飯能市矢張)	明王山大儀寺	大源寺	諸同行	高麗郡中藤村(飯能市中藤)	文殊院	無住	
高麗郡下名栗村(名栗村下名栗)	大照山延命寺	同左	諸同行	多摩郡北小曾木村(青梅市小曾木)	明法院	無住	
多摩郡烟中村(青梅市烟中)	無量山大行院	同左	諸同行	多摩郡上木村(青梅市木成)	少納言	無住	
高麗郡中藤村(飯能市中藤)	薬光山道林寺	同左	別當	秩父郡我野南村(飯能市南)	寿法院	無住	
				高麗郡井井村(狭山市井井)	成就院	無住	
				高麗郡井井村(狭山市井井)	勤行院	無住	

参考資料

1772(明和九) : 「山号寺号改證文」

1868(慶応四) : 「本末御改書上帳」

『新編武藏風土記稿』

注1 所在の郡名村名は、原典に基づく。

2 (現在の所在)は、推定のものも含まれる。

3 旧漢字は、便宜上改めたところもある。

4 寺持とは、修験寺院が別当職などにより管理している社寺堂で、それぞれの資料より確認できたものである。

5 寺格は、1868(慶応四)時点のものである。

6 —は、記載なし。

観音堂配下の修験寺院

観音堂配下の修験寺院は、観音堂が武州袖保並びに高麗郡の年行事職、さらに入間郡の一部の修験寺院を従えたことにより、江戸中期で54か寺、明治初年には68か寺を配下に従えていました。このなかから、特に狭山にあった修験寺院を紹介してみましょう。

薬王寺（笛井）は、最上山三光院と号して不動明王を本尊とし、代々觀音堂の執事職をつとめていました。滝音山が草創されたのち、役小角は入間川の竹が淵に薬師如来の使いの龍が現れるのをみました。小角は薬師如来を彫り、堂を建ててこれを納めましたが、これが薬王寺の由来となる薬師堂です。薬師堂は、病気をおすすめする草木を多数植えられています。修験が盛んであった時期には、薬師堂、弁天社、また入間川の岸まで続く「大門」とよばれる参道や「瀧上」の寺地など多くの寺領を持っていたと推察されます。

宮本院（柏原）は、鎮護山と号して不動明王を本尊とし、代々柏



弁財天額 薬王寺



木造薬師如来立像 薬王寺



十二神将像のうち丑 薬王寺

しらひげ
原白鬚神社の別当職をつとめていました。残念ながら1872(明治五)年に廃寺になってしまいました。白鬚神社に伝わる懸仏は、戦国時代から江戸時代にかけての貴重な資料で、修験の世界では重要なご神体であり、神仏混合の事例として、また柏原鑄物師と修験との関連性を知る上でも価値のある資料として狭山市指定文化財になっています。このような修験による別当寺としては、野々宮神社の別当であった天徳山宝泉寺(北入曾)があります。

こ やまぼう やくおうさん しもつけのくに
小山坊(柏原)は、薬王山と号して薬師如来を本尊とし、下野国
の武士小山判官朝政の眼病治癒の伝承が当坊開基の由来となっています。修験禁止令以来衰退し、1897(明治三十)年には福徳院(入間川)に堂を寄進し、一時は住まいて本尊をおまもりしましたが、1954(昭和二九)年に堂を再建して今に至っています。

きん ぶ さん たちかわりゅう
東林寺(下奥富)は、金峯山と号して不動明王を本尊とし、立川流の流れを汲む修験寺院です。立川流は、真言宗系の修験で、男女両性に基づき、性交をもって「煩惱即菩薩即身成仏」の実践を説いています。このため一時期「邪教」として断じられていた時代がありましたが、男女両性を主体に置いた信仰は、生産信仰として縄文時代から存在し、五穀豊穣、子孫繁栄を祈り、ひととのくらしが豊かになることを望んだものであったため、仏教他宗派などにも少なからず影響を与えました。天文年間(1532~1555)に多摩郡立川より移転してきたと伝えられています。このような関係から当山派の系統であった東林寺ですが、江戸時代には富森稻荷神社などを勧請し、神社別當にたずさわっていましたことから、觀音堂の配下に加わったと考えられます。

き そ よしたか とみもり いなり
これらの他にも、木曾義高伝承のある影隠地蔵が一時安置されたといわれる正覚院(上広瀬)などの修験寺院があったと伝えられています。



木造双身歡喜天立像 東林寺



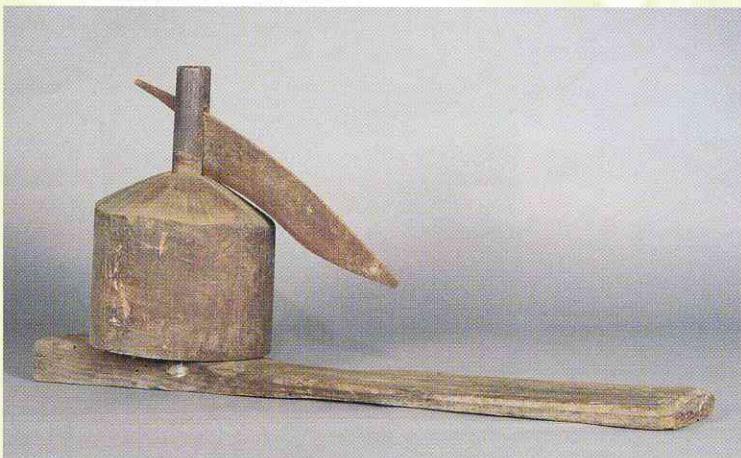
掛軸 不動明王図 小山坊



銅製懸仏(御正体) 白鬚神社(宮本院)
狭山市指定文化財



薬研 薬王寺

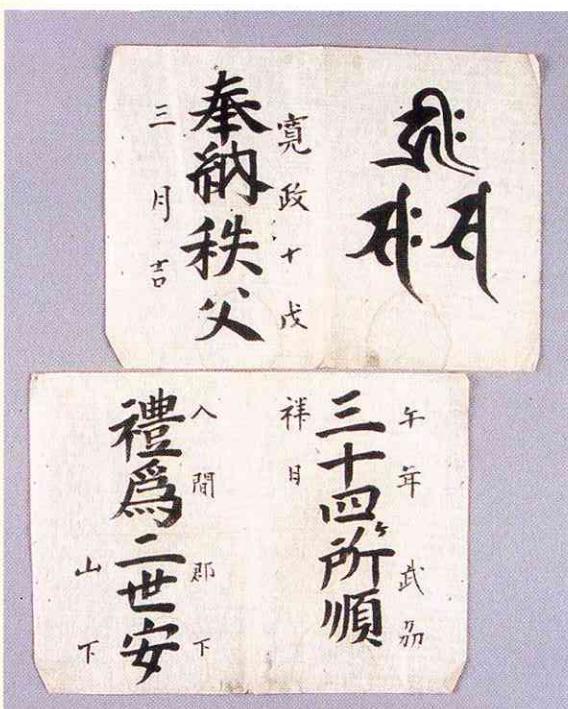


押切 薬王寺

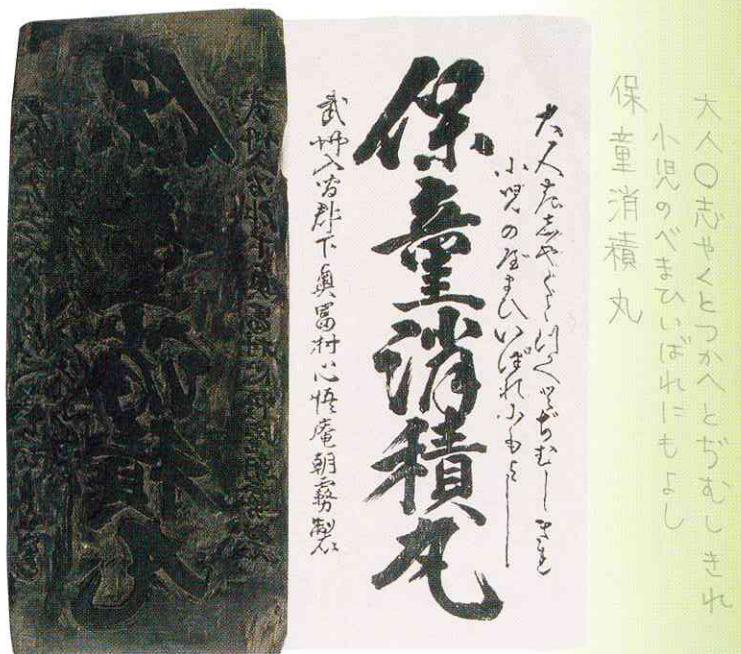
修験寺院の役割

修験寺院は、その時代に生きたひとびとの生活に欠くことのできない存在がありました。年とりの節分、梅雨明けの夏祭り、十五夜の月を待ち、來たる年の祝いに備える。家族や村落といった共同社会の中での年中行事や祭礼などには、修験寺院が多くの役割を果たしていたことがわかります。特に現在でも見ることができるもののひとつに、獅子舞や囃子があります。このことは、獅子舞や囃子が修験がかかわる祭礼に行われていたことを指しています。獅子舞の場合には雨乞い、囃子の場合は神樂などといったように、現在つたえられているもの多くは、別当寺があった神社に由来するものが大半を占めていることは注目すべき点であります。

修験者が身につけておく必要があるものとして、室町時代に書かれた『園城寺伝記』では、「顕宗・密宗・俱舍・修験・能説・声明・和歌・武勇・能書・画図・围棋」とあり、室町時代初期に書かれた『寺徳集』では、「顕教・密教・修験」とあります。

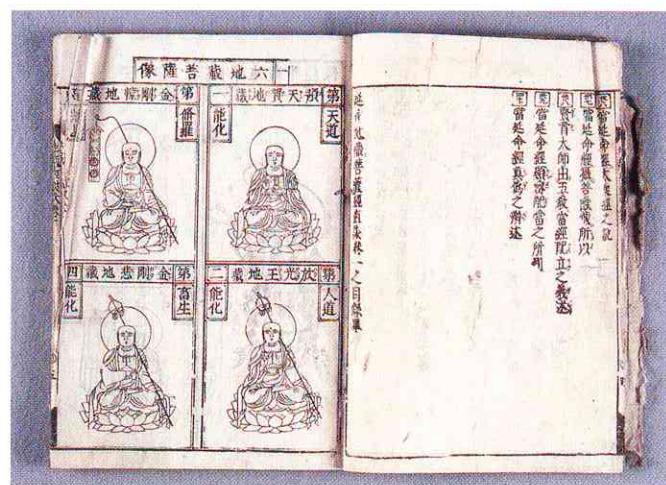


「秩父三十四ヶ所順拝供養塔文字案文」 東林寺

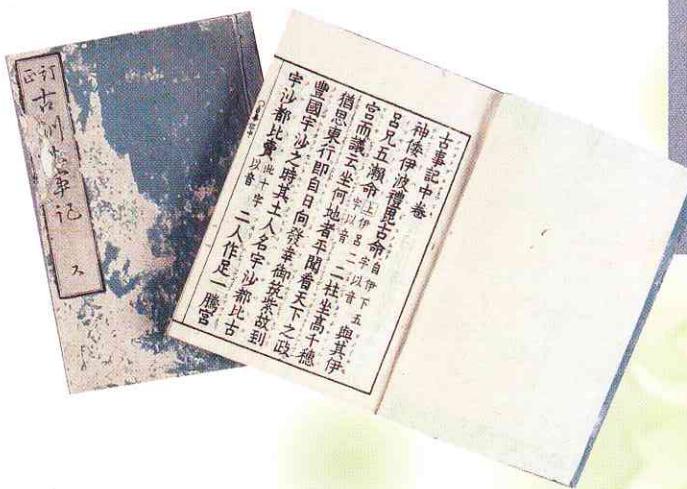


版木（漢方薬） 東林寺

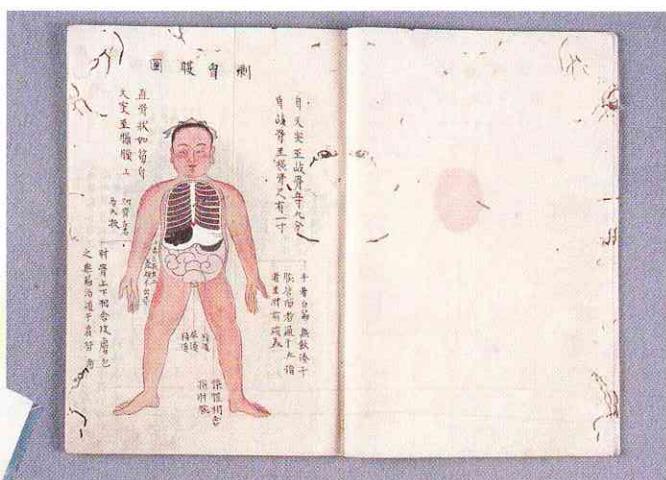
修験者は、広範な知識と教養により多才な活動をしていました。信仰の中心となっていた神主・僧侶はもちろんのこと、医者、薬剤師・製薬販売、易者、教師など職業のみならず、地域のひととの生活に必要なものを心身両面から救済していたことがわかります。ここに展示したのは、「觀音堂寺記」再編に助力した東林寺が所蔵していた書籍類です。これらの内容を見ると、東林寺代々の住職が当時たいへん貴重であった書籍をその必要性から少しづつ収集し、このような積み重ねによって多くの修験者が広範な知識や教養を身につけていったということを知ることができます。



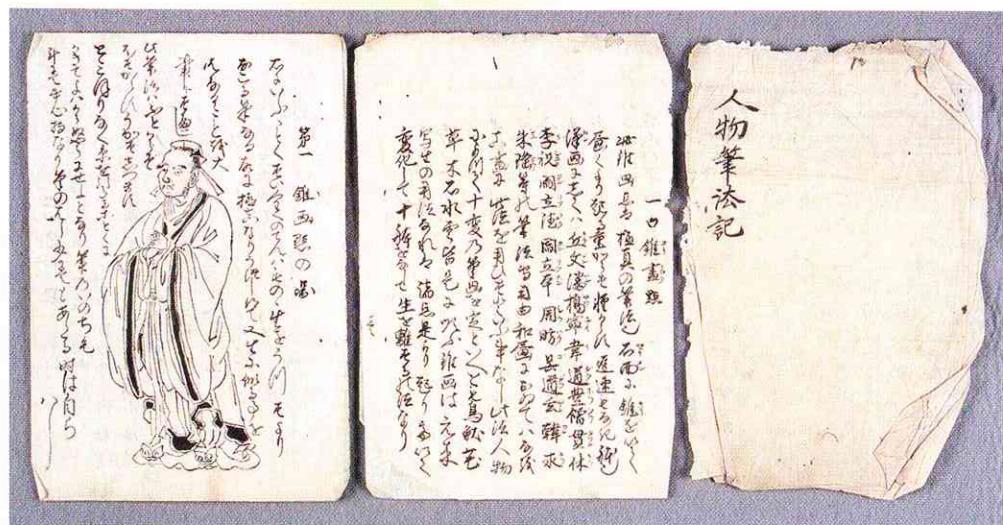
『地藏經鼓吹』1～6 東林寺



『訂正古訓古事記』中・下 本居宣長編 東林寺



『病相神論』写 山脇東洋原著 東林寺



『人物筆法記』
東林寺

狭山の修験

展示資料一覧

資料名	寺院名
銅造十一面觀世音菩薩立像 箱付	觀音堂
聖護院宮御用札	觀音堂
觀音堂所領絵図面	藥王寺
文書駕籠	觀音堂
御朱印箱	觀音堂
神鏡	藥王寺
木造聖徳太子立像	藥王寺
木造双身歡喜天立像	東林寺
『役談十義』	東林寺
『資道什物記』上・下	東林寺
『修験七部鈔』下	東林寺
『十八道私記』	觀音堂
『九字護身法』	觀音堂
『峯入法則』	觀音堂
『修験伝記』	觀音堂
心置申一札之事 明治二巳・六	東林寺
鈴懸(上・下)	觀音堂
結袈裟	觀音堂
如意	觀音堂
扇	觀音堂
頭襟	觀音堂
錫杖	觀音堂
螺旋	觀音堂
剣先脚半	觀音堂
足袋	觀音堂
「大般若經」	觀音堂
「大般若經 卷219」	觀音堂
「大般若經建立簿」弘化三.九	東林寺
版本 経文	觀音堂
『連名帳』	東林寺
杖	觀音堂
斧	觀音堂
「徳川家朱印状」 12通	觀音堂
風呂敷 徳川家家紋入	觀音堂
木造役行者半跏像	觀音堂
木造十一面觀世音菩薩坐像	觀音堂
木造不動明王・二童子立像	觀音堂
掛軸 积迦三尊・十六善神像	觀音堂
掛軸 积迦三尊・十六善神像	觀音堂
掛軸 愛宕曼陀羅図	觀音堂
掛軸 十二天図 双幅	觀音堂
掛軸 十一面觀世音菩薩八大龍王図	觀音堂
掛軸 五大明王図	觀音堂
掛軸 不動明王図	觀音堂
「篠井家文書」 16通	埼玉県指定文化財
「觀音堂寺記」	觀音堂
「法脈」案 (滻音山觀音堂)	東林寺
(由緒)案 (滻音山觀音堂)	東林寺
觀音堂図面	觀音堂
書状 女房奉書	觀音堂
蒔絵箱	觀音堂
印 (觀音堂・三十一世・花押・良孝)	觀音堂
刀袋	觀音堂
なぎなた袋	觀音堂
紙袋(御衣装束所)	觀音堂
黄地立葵紋懸衣	觀音堂
草鞋(沓)	觀音堂
輪袈裟	觀音堂
直綴	觀音堂
板袴	觀音堂
櫃 徳川家家紋入	觀音堂
杓子 徳川家家紋入	觀音堂
塑造不動明王・二童子立像	藥王寺
薬研	藥王寺
押切	藥王寺
弁財天 篇額	藥王寺
木造役行者二鬼像	藥王寺
木造薬師如来立像	藥王寺

資料名	寺院名
木造日光菩薩立像	藥王寺
木造月光菩薩立像	藥王寺
木造十二神将立像	藥王寺
渋谷家法脈	藥王寺
版木 護摩札	藥王寺
掛軸 不動明王像	小山坊 ✓
懸仏 (御正体)	狹山市指定文化財
『篠井觀音堂山号寺号改』 明和九	宮本院 ✓
『本末御改書上帳』 慶応四.八	觀音堂
『元亨积書和解』21.22.23 虎闘師練原著	東林寺
『手本』	東林寺
『薬師經纂解』1.2.3	東林寺
『地藏經鼓吹』1~6	東林寺
『注維摩詰経』5	東林寺
『善惡因果經龜鑑』1.3.4.7.8.11	東林寺
『仏説盂蘭盆經鼓吹』1~6	東林寺
『聖無動經慈怒鈔』上・下	東林寺
『天台四教儀集注』中・下	東林寺
『三教鈔』下	東林寺
『淨土安心鈔』	東林寺
『註十疑論・五方便念仏門』	東林寺
『撰択本願念仏集』上・下	東林寺
『一枚起請文鼓吹』1.2.3.4.5	東林寺
『元古仏錄』	東林寺
『日蓮宗相伝之大事』写	東林寺
『觀音靈驗記真鈔』1.3	東林寺
『道成寺靈蹟記』	東林寺
『中將姫行状記』1.2.3.4.5.7	東林寺
『稽古要略』	東林寺
『童蒙入学門』 平田篤胤原著	東林寺
『訂正古訓古事記』中・下 本居宣長編	東林寺
『古語拾遺言余抄』中	東林寺
『古史成文』 平田篤胤原著	東林寺
『八卦掌中指南』	東林寺
『頭書長暦』上・中・下	東林寺
『三国相伝箇箇由来集註』	東林寺
定 安永七戊戌.九	東林寺
『千字文』	東林寺
『女大学宝文庫』 貝原益軒原著	東林寺
『女用文章』下	東林寺
『莫妄想』 石田梅岩原著	東林寺
『易經 道春點』乾・坤	東林寺
『書經 道春點』天・地	東林寺
『詩經 道春點』上・下	東林寺
『春秋 道春點』	東林寺
『新增箇注蒙求』	東林寺
『韻鏡袖中秘伝鈔』2.4.5.6	東林寺
『濟民記』卷二 曲直瀬道三原著	東林寺
『病相神論』	東林寺
『阿蘭陀流伝書・名方類衆集』	東林寺
『象戲評論絹節』前編 写	東林寺
(『小笠原流礼法書』)	東林寺
『装束方高倉家御相伝書』	東林寺
『花伝書』 (池坊花伝書)写	東林寺
『惣益頼母子講仕法』	東林寺
『人物筆法記』	東林寺
版木 護摩札	東林寺
版木 漢方薬	東林寺
護摩札	觀音堂
朱印	東林寺
伊勢暦 慶応三	東林寺
「秩父三十四ヶ所順拝供養塔文字案文」	東林寺
『修験極印灌頂法』	東林寺
『正秘鈔』	東林寺
古文書類	觀音堂
古文書類	藥王寺
古文書類	長寿院 ✓
古文書類	東林寺

※1.資料状態等と一部展示替えのため、展示一覧掲載資料でも展示していない場合がある。

2.古文書のうち、特別に記載していないものについては、一括して古文書類とした。

3.寺院名については、資料の現所蔵、旧所蔵に限らず、修験寺院名を記載した。なお、展示資料のうち、護摩札(觀音堂)及び東林寺のものは当館所蔵資料である。